

平成 27 年度第 3 回文系チャレンジ講座を実施しました

平成 27 年度第 3 回文系チャレンジ講座が、平成 27 年 9 月 16 日、「輝く農業関連企業 大分県を中心にして」をテーマに、本学経済学部^{うぶききよたか}の鶴崎清貴先生によって行われました。

遠隔配信された大分鶴崎・大分商業・日田・安心院^{あしむ}・高田・国東・別府青山/別府翔青・大分西・臼杵の 9 校 (212 名) と、来学受講の大分 (25 名) の各高校から計 237 名の高校生が受講しました。

はじめに鶴崎先生は「今回の講座では、日本の農業における問題点を示します。これらの問題を克服するために、新たな担い手の参入・農業の工業化が急務と考えられています。本講座では、この現状を踏まえ農業への企業参入の現状を考察し、大分県における新たな担い手となる特色ある企業を紹介します。受講生のみなさんが、アグリ・ビジネス(agribusiness 農産物生産、加工、貯蔵、流通販売、農機具・肥料製造などまで含めた産業の総称) への理解が深まることを期待しています。また、アグリ・ビジネスの発展に伴い、証券市場へ上場する企業も見られるようになってきました。そのため、未公開企業の企業価値の算定方法についても事例を用いて解説します。」と、受講生に説明しました。



まず日本の農業の現状として農業就業人口の減少と平均年齢の高齢化、農業産出額と生産農業所得の減少、食料自給率の低下を問題点としてあげ、その解決策として新たな担い手の参入・農業の工業化が急務であり、また他産業からの農業への参入、植物工場の普及・拡大が必要であると説明されました。農畜産物・水産物の生産をする第 1 次産業だけではなく食品加工 (第 2 次産業)、流通・販売 (第 3 次産業) にも生産者が関わる、いわゆる第 6 次産業を推進することによって第 2 次、第 3 次産業の事業者たちが得ていた付加価値を生産者自身が得ることで農業を活性化させようとしていることも知ることができました。



そして大分県における農業への企業参入の推移を確認しました。参入企業の業種としては土地の活用を得意とする建設業が一番多く、品目は露地野菜、施設野菜、しいたけ、果樹の 4 品でほぼ 80% を占めることなどが説明されました。また農業法人として株式上場企業の具体例をあげ、キノコの人工栽培や農産物加工販売上などで業績を上げている企業の取り組みを紹介しました。大分県内の事例として、鉄道事業や薬品事業から農業分野に参入し、有機農産物の栽培や加工食品の生産・販売や大手飲料メーカーへ茶葉の納入を行う契約農園などの取り組みが示されました。

最後にこれの異業種に取り組む企業の株価を評価する評価モデルの方法があることも説明されました。

講座後のアンケート調査では、「総合的に判断して良かった」(86%「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ)、「教員は真剣に取り組んでいた」(96%)、「授業量は適切であった」(84%)、「わかりやすかった」(81%)、「受講生は授業に意欲的に取り組んだ」(88%)、という評価ができました。遠隔配信については



、「音声はよく聞こえた」(94%)、「映像はよく見えた」(91%)という結果ができました。受講生の具体的な声として「資料の説明が丁寧でわかりやすかった」、「農業に様々な企業が新規に参入していることに驚いた」、「企業経営の多角化で、企業のブランド力の向上に力を入れていることがわかった」「異業種参入によって企業の評価の変化を知りたい」など多くの感想が寄せられ、大学で学ぶ内容のスケールの大きさに気づいた受講生が多かったことが、アンケートから判明した講座でした。